【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	山　口　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	防府市立中関小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	3	4	4	2	25	39
児童数	130	128	133	120	145	153	12	821	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

豊かな学びを自ら追求する子どもの育成　　～算数科を通して～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・第３，４，５，６学年　・算数
　既習事項の理解が十分な児童とそうでない児童がおり、児童間の到達度に差が生じやすい教科であるため。

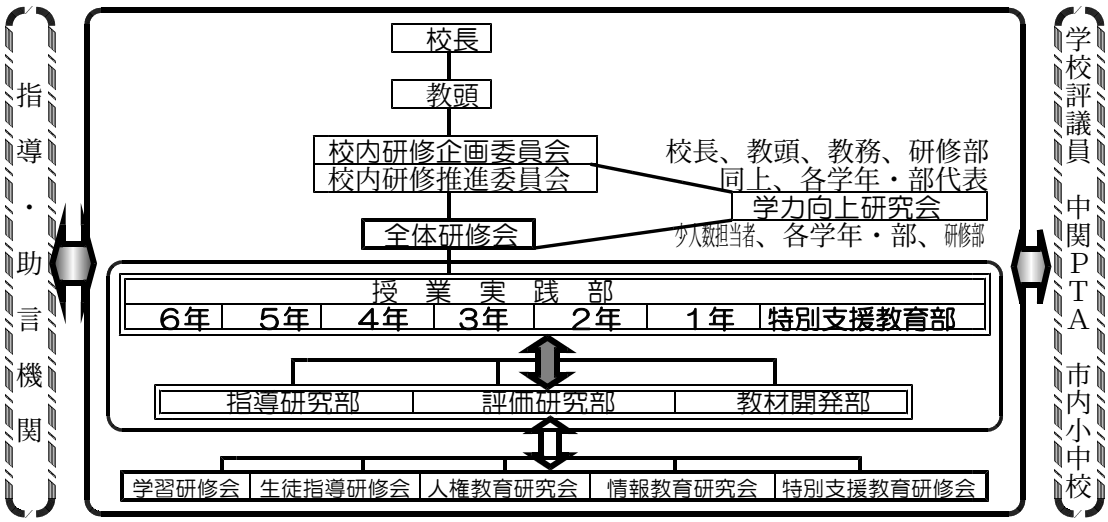
(2)　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ ・　確かな学力と学ぶ楽しさを育てる学習指導法や学習形態の工夫改善を図る。 ・　児童のよさや可能性が生き、豊かな学びにつながる指導と評価の在り方を探る。 ○　研究の見通し 仮説①　個に応じた指導方法や指導体制の工夫、授業で生かせる評価の工夫をすることで、効果的にきめ細やかな支援や指導ができ、基礎・基本の定着が図れるのではないか。 ②　学習集団で「表現し合い、考え合い」のある授業実践を行えば、意欲を高め、学ぶ楽しさを味わいながら学力の向上を図ることができるのではないか。 ○　研究の内容・方法 （１）学習指導法や学習形態に関する研究 ○ 児童の実態に即し学習内容に応じた学習形態や指導法の工夫 ・TT、課題別、習熟度別、均一型などグループ編成の方法の工夫 ○ 授業の中で、児童自らがねらいや問題解決に向けて「表現し合う」「考え合う」場や時間の設定とその支援の工夫 ・算数的活動（作業的、体験的、具体物を用いた、調査的、探求的、発展的、応用的、総合的な活動）や話し合いなどを取り入れた授業の構成 ・児童の言動を生かす支援の工夫 ○ 基礎・基本の定着を図る継続的な朝の学習、家庭学習などの工夫 （２）評価に関する研究 ○ 評価計画の作成と授業での活用 ・単元計画における評価計画の作成 ・授業場面での評価方法と児童に対する支援としての手だての工夫 ○ 学びの過程や振り返りがわかるノートのとり方の研究 ○ 自己評価、授業評価の工夫

・自己評価カードやノートを用いた学習の振り返り方の工夫
○ 目標規準準拠検査（ＣＲＴ）の実施による実態把握と活用
（３）教材の開発に関する研究
○ 発展的・補充的な学習など個に応じた教材やプリントの作成
○ 情報機器及び実物や具体物などを効果的に活用した教材の開発

平成16年度	○ テーマ ・ 児童のよさや可能性が生き、豊かな学びにつながる指導と評価の在り方を探る。 ・ 児童の学ぶ意欲を促し、確かな学力を保障する教材開発に取り組む。 ○ 研究の見通し ・ 児童の学力を生かした評価と授業評価 ・ 児童の学ぶ意欲を促し、確かな学力を保障する教材開発 ○ 研究の内容・方法 ・ 評価計画の作成と授業での活用、授業評価 ・ 発展的な学習や補充的な学習を取り入れた指導

(3) 研究推進体制



Ⅲ 平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

（１）学習指導法や学習形態の工夫

○ 学習形態の工夫

・ＴＴのよさを取り入れた指導

単元の中で、ＴＴや少人数を効果的に用いることで、児童の興味・関心や意欲を継続しつつ個に応じた指導をすることができる。ＴＴ→習熟度別→ＴＴ、ＴＴ→興味・関心別→習熟度別→ＴＴなど、単元の内容や活動、児童の実態に応じて学習形態を工夫した。

・均一型での少人数指導

考え方を出したり考えを練り合ったりする学習で、効果的な指導である。出席番号順や席順等、意図のない編成でグループをつくるので、グループの中に理解力の高い児童やそうでない児童がいて、多様な考えが出てくる。３年「計算のじゅんじょ」や４年「式と計算」「もとの数はいくつ」などでは効果的であった。

・習熟度別での少人数指導

レディネステストの結果を参考に、児童の選択で習熟度別の少人数指導を実施した。かけ算やわり算や小数など、学習の定着に著しい差が見られる「数と計算」領域では効果的である。また、単元の終わり

で学習の定着を図る内容や発展的な内容を取り上げる場合も、児童の探求のニーズに応えることが可能で、習熟度別の指導は効果的である。各コース間の移動も認め児童の判断に任せたが、分かるようになった児童にはコースの変更を勧め、少ない人数で指導できるようにしてきた。特に、学習の定着に時間を要する児童にとっては、じっくりきめ細かな指導ができ、児童一人一人の学びがより確かなものになった。

○ 授業の中で、「表現し合う」「考え合う」場の設定とその支援の工夫
　教え合いかかわり合うことによって、「友達の考え方がわかった」「自分の考えがもてた」という声が、自己評価カードや算数日記などで多く見られるようになった。人と人とだけでなく、人ともの、具体物を介して人と人とで、多様なかかわり合いをもてるだけでなく、その回数や機会を増やすことが可能である。

○ 基礎・基本の定着を図る継続的な学習の工夫
　教材開発部を中心に、学年ごとでミニ計算プリントを作成した。朝の時間や授業中などに実施し、学力の定着を図った。

○個別指導の工夫
　まずは、授業時間にしっかりと指導をしていくことを心がけている。休み時間や放課後の時間が取れるときには個別指導をして、学習内容の定着を図った。
　夏休み（７月）には、６年の希望者を対象にして個別指導を実施した。さかのぼり計算プリントを教材として、一人一人に応じた丁寧な指導をしたので、苦手な算数に意欲をもって取り組め、保護者にも喜ばれた。

（２）評価を生かした指導の工夫
○ 評価計画の作成と授業での活用
　観点毎の評価規準を授業レベルで設定し、それをもとに評価基準を作成した。それを指導計画へ位置付けることで、単元の中で児童に付けたい力とそれぞれの段階の児童への支援の方法を明確にした。特に、Ｃと判断した場合の手だてをはっきりさせたことは、授業における指導と評価の一体化に直結した。

○ 自己評価、授業評価の工夫
　内容理解度「わかる」と学習満足度「楽しい」と、学習中の気付きや友だちとのかかわり等について、振り返りカードや算数日記に記述している。高学年では、自己評価だけでなく相互評価も書かせることで、友達のよさにも気付くなど、温かみのある授業となってきた。
　児童にとっては、振り返ることで学びを確認でき、次学習への意欲付けになり、学習への集中力が高まる。教師にとっては、次時の支援の在り方や授業構成の再考に役立つ。

（３）アンケート結果から
　３～６年の児童に、４月当初と２学期末に共通のアンケートを行った。単元ごとにアンケートを行った学年もあるが、これら２回のアンケートを集計すると、少人数指導によって以前に比べて算数の授業が「楽しくなった」と回答した児童は 72.5%、算数の授業が「わかるようになった」と回答した児童は 78.5%という結果が出ている。
　また、少人数指導のよさについての質問では、「自分に合った速さで学習することができた」、「人数が少ないので落ちついて学習できた」、「わからない時すぐに教えてもらえた」など肯定的な意見が多く出ていた。

　３～６年の保護者に２学期末に行ったアンケート結果を見ると、少人数指導実施については 88.4% の保護者が児童から、または学級・学校だよりなどを通じて知っており、半数近くが参観も経験しているということがわかった。「子どものつまずいているところに気付き、個々のレベルに合わせての指導ができることを期待している」「少ない人数だと一人一人が発言する機会が増えるのでよい」「他の教科にも取り入れてほしい」など、保護者側でも肯定的な意見が大変多く見られた。

２．今後の課題

（１）授業で生かせる評価の工夫（指導と評価の一体化）
　授業の中では、教師がより客観的で的確な評価の在り方を探るためには、「いつ」「どんなことを」「どんな方法で」評価するのかをより具体的にしていくことが課題となる。また、「確かな学力」を身に付けたかどうかについて、各段階にある抽出児を比較検討して考察していくなど、さらに視点を定めた授業の評価を行う必要がある。
　今年度は研究一年次ということで、目標規準準拠検査（ＣＲＴ）の実施に留まったが、来年度は１６年度実施検査結果と比較検討を行い、基礎・基本についての定着の実態をつかまなければならないであろう。

（２）発展的な学習や補充的な学習を取り入れた指導
　個に応じた指導をさらに充実させていくために、児童の興味・関心、能力等に応じて、さらに学習を広げたり深めたりしていく。単元の終わりの時間など、児童の理解や習熟の状況に応じて、学習内容を工夫したい。そうすることで、算数を学ぶ楽しさと充実感を味わえるようにしたい。
　また、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るために、補充的な学習も大切にしていく。学習の過程での理解や習熟の程度に応じて繰り返し学習し基礎・基本を身に付けたり、算数的活動を繰り返し行い算数にかかわる感覚を豊かにしたりしていきたい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

○目標基準準拠検査（ＣＲＴ）
　児童の実態をつかむとともに、これからの指導の資料とする。
　１学期中に実施し、１５年度の検査結果と比較検討する。

○児童へのアンケート
　学習への興味・関心や理解度、簡単な授業評価を実施し、児童の実態をつかむとともに、授業改善に生かす。
　内容理解度「わかる」と学習満足度「楽しい」については、５段階で自己評価する。授業の感想や教師へのお願い等は記述式とする。
　単元末に実施。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

＊　管内学力向上フロンティア事業地区協議会（１月３０日）で、１年次の成果を発表する。
＊　学力向上フロンティアスクールの取組（１年次）のまとめの冊子を作成し、管内の小中学校へ配布する。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑ １５年度からの新規校　☐ １４年度からの継続校

【学校規模】　☐ ６学級以下　☐ ７～１２学級
☐ １３～１８学級　☐ １９～２４学級
☑ ２５学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　☑ Ｔ．Ｔによる指導
☑ 一部教科担任制　☐ その他

【研究教科】　☐ 国語　☐ 社会　☑ 算数　☐ 理科
☐ 生活　☐ 音楽　☐ 図画工作　☐ 家庭
☐ 体育　☐ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　☐ 無